

離島へき地歯科医療学 : 離島巡回診療同行実習

著者	中村 典史
雑誌名	鹿児島大学歯学部紀要
巻	29
ページ	11-13
発行年	2009
URL	http://hdl.handle.net/10232/17004

歯学部における特色ある教育の取組

離島へき地歯科医療学

近年、我が国の歯科医師数過剰に伴って厚生労働省による歯科医師数の削減の努力が進むなかで、医療へき地といわれる地区も相当数存在しているのが現状である。平成16年の調査で鹿児島県内の無歯科医師地区は7町村の27地区に及んでおり、なかでも離島では今後急速に改善される見通しはたっていない。そうした中で、南九州における唯一の歯科総合病院としての鹿児島大学病院歯科診療棟（旧鹿児島大学歯学部附属病院）は、昭和55年の開院以来、約30年にわたる無歯科医師地区の鹿児島郡三島村、十島村、口永良部島の島民に対して、歯科保健に対する意識の向上や口腔健康の改善に大きく寄与してきている。開始当初は、年間活動日数が約25日程度であったが、現在では年間2か月程度、各地区を平均2回訪れて、歯科診療科活動や歯科保健指導を行い、乳幼児・学童の虫歯の大幅な減少を遂げている。

そのような中で、平成19年、鹿児島大学歯学部では、鹿児島県下の離島やへき地をモデルとして、地域社会や国際的な歯科医療へき地で求められる歯科医療や口腔保健について学ぶ「離島へき地歯科医療学」が立ち上げられた。本講義は、歯科医師数の過多や都会偏在によって生じる都市部における歯科医師過剰、一方、地方での医師、歯科医師の不足などの社会的問題を顧み、国内外における離島へき地医療に貢献できる医療人の育成を目指すものであり、離島へき地包括的医療に関する高度の知識と幅広い支援方法を習得し、医療人としての質的向上および離島へき地医療に関わる人材の増加を目的としている。鹿児島大学では、大学院医歯学総合研究科においても離島へき地医療人育成センターが設立され、平成20年には離島へき地医療人育成国際シンポジウムが開催されるなど、医学、歯学双方で鹿児島大学の特色ある教育プログラムとして離島へき地医療人育成に取り組んでおり、大学全体にとっ

離島巡回診療同行実習

ても重要な意義をもつカリキュラムである。

本講義の概要を紹介する。本講義は歯学部5・6年生を対象に年間30時間の講義と離島巡回診療同行実習から構成される。5年生後半から始まる講義では、鹿児島県下における無歯科医師地区における口腔保健の現状や、離島巡回診療を長年続けて行ってきた鹿児島大学歯学部の足跡と口腔保健面での向上の実態を学びながら、離島へき地における口腔保健の問題点、離島へき地において実践される歯科医療の特性とその変遷を学ぶものである。昨今、目まぐるしく移り変わる社会環境の変動に伴って、鹿児島県の離島に住む人々の職業や特性も大きく変化しており、一部の島では極端な過疎化と1ターン現象により、都会で育って島に移り住んだ人々が増加しているものもある。従来行われてきた抜歯、切開、義歯修理などの応急処置主体の診療から、次第に求められる診療内容も充実してきているのが現状である。また、国際歯科保健医療に関する講義では、ネパールで約20年間にわたって、歯科保健推進の援助を実践した実績をもつ九州歯科大学国際交流・国際協力室長中村修一先生を招き、アジア発展途上国における歯科保健環境の開発の実態を知る。また、鹿児島大学口腔外科、口腔顎顔面外科で以前から進めてきた口唇口蓋裂を始めとする口腔顎顔面疾患に関する海外医療援助活動の実際を学ぶことで、長期滞在型医療活動と短期滞在型医療活動のそれぞれの問題点と国際医療援助のあり方について学ぶことができる。鹿児島大学は我国の南端に位置することから、「アジアのリーダーとなる人材育成」を大きな教育目標の一つに掲げており、これらの講義は将来的に国際的な歯科医療活動を進める人材を育てるうえで、重要なモチベーションを与える機会となる。また、国際間で徐々に拡大しつつある医療格差の是正という医療先進国日本に与えられた大きな課題を学生が認識し、将来的にその

ような活動に携わることが期待できる。

一方、離島巡回診療同行実習はすでに実施されて2年が経過し、参加学生からは、充実した体験談が聞かれる。さらに、このカリキュラムを大学案内で知って鹿児島大学歯学部への進学を希望するきっかけとなった受験生も少なくない。現時点では、並行して行われる臨床実習のカリキュラム、卒業試験の時期との問題や、受け入れ体制などの問題などから、年3回の巡回診療に2人ずつ同行できるという制限があり、多くの参加希望する学生の中から同行者を選出する形となっているが、徐々に巡回診療に参加できる学生数を増加させていく計画となっている。ここで、悪石島への巡回診療への同行実習生を例にとりながら、同実習の実際を紹介してみたい。今年の悪石島への同行者は、男子学生2名で、歯科診療を担当する鹿児島大学の教員、研修医、鹿児島県歯科医師会口腔保健センターの歯科衛生士、ならびに同行実習指導教員とともに鹿児島県歯科医師会が所有する歯科巡回診療車「こじか号」に乗って、夜11時発の奄美大島行き渡船で離島に向かった。片道11時間程度の船旅で、学生達は初めてみる離島に自ずと期待が膨らむ。翌日、早朝に諏訪之瀬島に到着すると、港の岸壁に歯科検診を希望する学童が10数名待っており、急ぎ船内で歯科検診を行う現場に直面した。諏訪之瀬島における歯科診療は後日、別の日程で診療団が訪れる予定となっており、今回は歯科健康診断だけが行われた。その後、目的地の悪石島へ10時に到着した。

同行実習生達は、まず島のコミュニティーセンターで、ポータブルの巡回診療器具の設置準備を手伝った。その際、大学の講義や実習では習わない歯科診療機器の各パーツの構成やその組み立て方を学ぶことができ、極めて興味深い体験をすることができたようである。歯科診療は2台の診療台（1台はこじか号の診療台、もう1台はポータブルの診療台）を使って義歯調整や齲蝕治療の介助や口腔衛生指導の補助を経験しながら、多くの島民と触れ合い、離島へき地医療の重要性を体感した。今回は台風が接近するというので、地元の民宿に1泊し、翌朝には鹿児島に戻るという過密なスケジュールであったが、離島の医療の現状を知る上では十分に豊富な体験をすることができたと思われる。彼らは、大学に戻ってから、その活動内容を同行実習に参加できなかった学生に対してその詳細を発表し、鹿児島県下の離島の抱える歯科医療の問題点と今後の離島へき地歯科医療のあり方を互いに述べ合う良い機会となった。

離島歯科巡回診療に同行した学生へのアンケートの一部を紹介する。「学生が離島診療実習で行うことは基本的に診療場所の設置、診療のアシストが主であり、自分は検診結果の記入、ブラッシング指導、患者さんへの説明、アシストなどを行うことができた。離島診療という特殊な環境下での診療体験から多くのことを学ぶことができた。特に、大学病院とは異なる治療計画の立案や、限られた時間内での診察および治療を間近に体験し、歯科治療に関する選択肢が広がったよう



悪石島コミュニティーセンターとこじか号



特設診療台での診療介助風景

に感じる。より大きな枠の中での歯科治療の選択を考えるようになり、非常に有用な経験をすることができた。」など、多くの学生が、ポリクリ主体の大学での実習より、近い位置で臨床現場に触れることが出来たという意見を述べていた。以前の臨床教育に比べ、見学主体となりつつある臨床教育の中にあって、患者と触れ合う機会を欲する学生には掛け替えのない経験となったようである。問題点もいくつかある。その多くは、基本的には、2泊3日程度の短期実習の現スケジュールに対して、もっと長期間、同行実習に参加したいという、本カリキュラムに対して肯定的な意見が多い。このような意見を受けて、今後、さらにこの同行実習を臨床教育の一貫と位置づけて、発展していければよいと思われる。

鹿児島大学歯学部の開設に関わる歴史をひも解けば、昭和47年9月に、南九州における歯科医師不足の解消、歯科教育充実、歯科医や口腔外科医の養成を目的として鹿児島、宮崎、沖縄の三県とその歯科医師会、関係団体が歯学部設置期成同盟会を発足したことに始まる。鹿児島大学歯学部および病院の地域連携は、これらの広い地域に優れた歯科医師を輩出すること、歯科医療関係者の生涯教育に資すること、地域の歯科医療の充実に役割を果たすことの3点に要約され、離島巡回歯科診療が過去にMBC賞を受賞するなど地域連携の証

となってきたと言える。今後、この特色ある離島へき地歯科医療学と離島歯科巡回診療同行実習が、高い志を有する歯科医師を育成することによって、鹿児島大学歯学部の社会的な使命が十分に果たされるとともに、さらに広く国際的に活躍する人材が育っていくことが期待される。



こじか号内での歯科診療介助

最後に、この離島巡回歯科診療同行実習の実施にあたっては、鹿児島県歯科医師会、ならびに各島の医療保健業務に関わる多くの方々のご理解と協力によるところが大きく、この機会に感謝を申し上げたい。

(離島へき地歯科医療学同行実習作業部会、
口腔顎顔面外科学分野 中村 典史)